資料渉猟余話

その147

明治6年文部省刊行教科書
飯田生まれの田中義廉編「小学読本」

竹村雄次

南信州地域資料センターに、明治草創期の教科書「小学読本」が所蔵されている。飯田出身の田中義廉（よしかど）が編纂したもの。義廉は博物学者の田中芳男の実弟。兄のことを知る人も、弟は知らないという人も多いだろう。義廉と同書について紹介したい。

資料センターには、同センターの吉澤健理事長の寄贈されたものを含む一、四、五、六巻がある。吉澤理事長は『伊那』2018年11月号に「田中芳男・義廉兄弟編集の小学読本と嫁入り本について」で同書を取り上げているので、ここでは、できるだけ別の視点で紹介をしたい。

まず、田中義廉について。義廉は、天保12年（1841）飯田城下の医師田中隆三の四男として生まれる。先に蘭学や医学を学び、その後、英語やフランス語を修め、幕府海軍士官となった。慶應4年彰義隊に属し敗走するも、明治2年には、新政府の海軍御用掛に。有能さが買われてのものだろう。その後、文部省に転属。学制発布を受けて教科書編纂に着手し、明治6年「小学読本」を発行。翌年文部省を退官するが、その後も多くの教科書を手掛けた。しかし、明治12年38歳で亡くなっている。

次に、「小学読本」について。同書のうち、まず一～四巻を文部省から刊行し、後に民間から五、六巻を発行した。文部省の刊行と言っても、教科書の国定化は明治36年。同書刊行の学制発布直後には、教科書は自由発行、自由採択制の時代。この読本は、教科書のモデルとして作ったもののようだ。しかし、各地で採用されて、各県の翻訳版も多く、明治10年代まで使用されたという。ちなみに資料センター蔵の第一巻は、裏書を見ると明治16年岐阜県版だった。

同書の一、二巻は、アメリカの小学校教科書『ウイルソンリーダー』を翻訳したものだというので、ネット検索をすると画像が出てきた。しっかりした造本で、活版印刷、挿絵も現在の印刷に近い。それが「小学読本」は木版和綴じ本。その違いを見るだけでも楽しい。文を比べると「This boyhasanewkite.Doyouseehimrunwithit?/Hecanflythekiteintheair.」は「此の子は、新しき紙鳶（しえん・タコのこと）を持てり、彼が糸を持ちて走るを見よ○彼は紙鳶を高く飛ばせんと思うなり」となっていた。現代人には、英文の方がやさしいという人もいそうだ。当時の文語では翻訳され、漢字も使われていた。字を習うための教科書ではなく、江戸期の寺子屋のように教師が範読し、子どもが暗唱をする学習が行われていたようだ。

田中義廉編『小学読本』と第一巻冒頭部分　南信州地域資料センター蔵

ちなみに、ウイルソンリーダーの翻訳部分は第一巻二章からで、冒頭の第一章はオリジナル作品が載っていた（写真）。それは、「凡地球上の人種は、五に分きたり　亜細亜人種　欧羅巴人種　馬来人種　亜米利加人種　亜弗利加人種これなり　日本人は亜細亜人種の中なり」で始まる。そして続けて「人は賢きものと、愚かなるものとあるは、多く学ぶと学ばざるとによりてなり」とあった。この冒頭には、世界を知ることと、学問の大切さを説く編者田中義廉の思いが込められているようだ。義廉自身が早くから蘭学を学んだことや、彰義隊に参加したが新政府に取り立てられたことなどが反映しているのであろう。当時の子どもたちはみなこの部分を暗唱できたというので、このメッセージは伝わったことだろう。

「小学読本」がこのように受け入れられたので、明治8年に五・六巻が加わる。兄の田中芳男が校閲をしている。これは「小学読本」と言っているが、博物の教科書である。五巻は動物、六巻は植物と爬虫類両生類について。兄弟合作のこの教科書は、科学的な目を大切に思う二人の思いが溢れている。兄芳男のその後の活躍を考えれば、記念碑的な本と言ってよいし、弟の義廉も同じような興味を持つ人だったのがわかる。

義廉も、もう少し長生きできたなら兄と同じような大活躍ができた人だと思う。伝えていきたい地域の偉人であり、大切にしていきたい本である。